

室蘭記念鉄製

多言語案内板、体操支援システム

室工大と共同研究推進

室蘭市の製鉄記念室蘭病院（松木高雪理事長、前田征洋院長・347床）は、2011年から室蘭工業大と、高齢者の体操支援システム開発や多言語案内板の作製などで、共同研究を進めている。

体操支援システムの開発では、高齢者の体力維持・向上を目的に、各種動作計測、評価実験を推進。体操中の関節位置や動きをデータ化し、リスクを検証して転倒予防に向けた「リハビリ支援ツール」として活用していく考えだ。将来的には、測定データを医療施設に転送する遠隔医療支援システムを開発し、在宅診療の充実につなげたいという。

5月下旬には、同病院訪問リハビリセンターと、地域包括支援センター共催の介護予防運動教室「せいてつ健康教室」で、同大の学生が参加者の関節可動域を測定し、データ分析を行った。

訪問リハビリセンターの村岡洋平所長は「転倒リスクの軽減や変化の察知にもつながり、高齢者が地域で安心して生活できる場も担える」と話す。一方、同病院は17年4月に外国人旅行者の受入可能な医療機関に選定されたのを踏まえ、円滑な受診に向けた体制整備の一環で、同大協力のもと多言語案内板を作製した。文字のフォントと大きさなど視認性を考慮し、設置する空間に馴染むように工夫。日本語のほか英語、中国語、韓国語の4カ国語を用いて、救急玄関や放射線科受付、床面の案内ラインなど、患者が受診時に利用するゾーンにも設置している。



視認性が高く、周囲の環境に馴染むよう工夫された多言語案内板

今後共同研究で互いの資源を活用した連携を進め、地域に貢献していく考えだ。